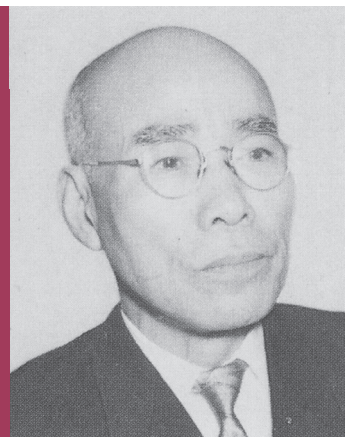


三島 徳七 小伝

Tokushichi Mishima



三島徳七氏は、明治26年（1893年）2月24日兵庫県淡路島に生まれ、第一高等学校を経て大正9年東京大学工学部鉄冶金科を卒業された。同大学講師、助教授を経て昭和13年教授に昇任、24年日本学士院会員、28年3月同大学を定年退職された。この間昭和20年帝国学士院恩賜賞、20年文化勲章を授与され、26年には文化功労者となった。

また、日本工業標準調査会その他各種の審議会委員として、規格の制定、航空技術の育成、外国技術の導入審査、原子力利用の開発、新金属の製造、発明奨励、新技術開発などの広範な分野に方針の決定、施策の実施に学識経験者として多大な貢献をされた。

氏の行った研究業績は、鉄鋼製造冶金特に磁石合金をはじめとする特殊鋼に関する研究並びに鑄造技術の研究を中心として極めて広範にわたるものである。永久磁石合金の研究は其中で最も著名なもので、従来の鉄ニッケル合金にAlを添加すると磁氣的に興味ある現象が生ずることを認め、その物理的性質に及ぼす影響を追求して昭和6年MK磁石合金を発明された。この研究は世界に先駆けて分散析出型磁石を創出したもので、永久磁石の発明史上に画期的意義を持つものである。その後本合金の状態図を作成して磁性と化学組成、熱処理条件などの関係を研究し、最適の成分範囲と熱処理条件を決定するとともに高保磁力の発生機構を解明された。更に添加元素としてCo、Cu、Siその他種々の元素の影響を検討して磁性の改善を図った。戦後はMK磁石合金の磁場処理効果を研究し、成分及び不燃物の影響、磁場の強さ、熱処理条件、磁氣的諸性質などの関係を検討し、従来のMK磁石の3倍の磁力を有する異方性MK磁石合金を発明した。またNi、Coを含まない高保磁力合金を研究しFe-Al-C系MT磁石を発明しその工業化に成功した。また冷間加工の容易なFe-Co-V-Cr及びFe-Co-V-Cr-Ni系永久磁力についても優れた研究を完成された。

日本鉄鋼協会に関しては、昭和21年と昭和37年の2回にわたり会長に就任され、それぞれ2年間、敗戦直後の最も困難な時期と事業の拡大強化が始まった重要な時期に、本会の発展に尽力された。

日本鉄鋼協会は、昭和30年に氏に製鉄功労賞を贈り、36年に名誉会員に推挙し、また昭和40年創立50周年に際して新設した俵賞（ゴールドメダル）の第1回受賞者に選定した。昭和50年11月19日逝去された。

同氏記念のため、三島家から寄贈された資金300万円に、募金により集められた資金を加えて日本鉄鋼協会に三島徳七記念資金を設け、同氏の追悼録を刊行し、三島賞の授与を行っている。